

主 題	おしぼりたたみを通しての心の関わり方
副 題	～ここにいる意味がない。何もやることがない～

ケアの質の向上	レクリエーション	研究期間	2ヶ月
---------	----------	------	-----

事業所	社会福祉法人 すこやか福祉会 葛飾やすらぎの郷		
発表者：鄭 允枝（ちょん ゆんじ）		アドバイザー：木下 万誠（きのした かずなり）	
共同研究者：			

電 話	03-5648-8250	E-mail	yunji-chon@totokyogikai.jp
FAX	03-5648-8251	URL	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	東京都葛飾区にある特別養護老人ホーム 葛飾やすらぎの郷。 地域に開かれた福祉の場として、文化行事の開催や施設利用の場を広げています。障害をもって認知症を有しても、地域とのつながりをもってその人らしく暮していくことを援助して行きたいと考えており、キーワードを“在宅”として、在宅で過ごしていたように暮していける施設づくりを進めています。
------------------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

対象利用者 K 氏は、施設入所に対して前向きな気持ちを持っておらず、家に帰りたと思っている。その為からか、気分の浮き沈みが強い。“自分のことは自分でやる”という性格である。しっかりと会話もでき、日常生活動作に問題はない。

気分の落ち込んでいる時の K 氏は、1 日に何度も転倒、または自ら床に座り込み、寝転んでしまう。その際に消極的、否定的な発言が多く聞かれ「ここにいる意味がない。何もやることがない。」と訴えることも多かった。

K 氏の 1 日はほとんど椅子に座って過ごす事が多く、ご本人の発言通り、何もやることがない状況であった。

K 氏の気分の落ち込みが強い時に話された「何もやることがない」という発言を、どう受け入れ、どのように K 氏と関わりを持っていくかが、今回の課題であった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

対象利用者 K 氏の気分の落ち込みをなくし、転倒、または自ら床に座り、寝転ぶことを減らしていく。

施設内の生活を少しでも前向きにとらえてもらう。また、施設の中で行っているレクリエーション活動などに参加してもらい、活力を持ってもらう。

「何もやることがない」という発言から、なにか小さなことでもご本人に役割を持ってもらい、“私はここで必要とされている”と感じてもらおう。

ご本人に行ってもらおう役割として、おしぼりたたみを提供し、この研究に取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

1つのテーブルを用意し、そのテーブルに対象利用者K氏と、他利用者2名を選び、配置する。

他利用者2名の選び方として、K氏よりも日常生活動作に介助が必要な方を選ぶ。また、K氏から話しかけられるような穏やかな性格の利用者を選ぶ。他利用者2名は、毎日同じ人達で行う。

おしぼりは20～30枚用意。当施設内にある洗濯課におしぼりの準備を依頼。取り組む時間は11:30～12:00。おしぼりたたみ専用のカゴを1つ準備。主にフロア職員と機能訓練指導員で行う。

《4. 取り組みの結果と考察》

当初は断られることが多かったが、徐々におしぼりたたみに取り組む姿が見られるようになった。おしぼりたたみをお願いすると「やりますよ。皆さんに任せっきりもよくないですね。」と笑顔でおしぼりたたみを行ってもらえた。気分の落ち込みが少なくなり、転倒する回数も減った。また、他利用者や職員と笑顔で話すことが増えた。体操やコーラスなどの施設行事の誘いにも、参加するようになった。

K氏は、施設生活のほとんどを一部介助、見守りされている環境で生活している。

“自分のことは自分でやる”“人のお世話にはなりたくない、迷惑かけたくない”と強く思うK氏にとって、施設での生活、誰かしらにお世話をされる状況が気分の落ち込みに繋がったのではないか。

このような状況から、今回おしぼりたたみという役割を、他利用者2名と共に行的ってもらった。この取り組みに参加した利用者を考慮したことで、K氏の気持ちに余裕が出来たのではないか。

そのため、気分の落ち込みからの転倒、自らの座り込みも減らすことが出来たのではないか。

《5. まとめ、結論》

施設に入所していると、自立度が高くても職員から何かしらの介助を受ける機会がある。なんでも自分でやってきたK氏にとって、施設入所は“世話になって申し訳ない”と思う毎日になってしまった。申し訳ない気持ちから消極的、否定的な発言、転倒などへ繋がったのではないか。

しかし、今回のおしぼりたたみをきっかけに職員から一方的にではなく、相互に世話を受けたり、世話をしたりという関係になった。そのことで施設にいる意味ができ、また施設での生活を受け入れられた。

誰かを助ける、誰かに認められるということを実感することが、生活していく中で必要なことであるとわかった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うために、K氏本人、K氏の家族へ説明を行う。本研究発表以外では使用しないこと、またそれにより不利益を被ることはないことを説明し、同意を得た。

《7. 提案と発信案》

入所施設では、介護度が重い高齢者の身体介護などが主な介護になり、本研究のようなことに取り組むことが難しい現状である。

本研究のおしぼりたたみを行うにも、人員に余裕がなく、行えない日もあった。

今後介護度が重度化していくなかで3:1という配置基準でよいのか。高齢者の心の関わり方や、その人らしい生活を送ってもらうための介護が出来るような配置基準にするべきではないか。

【メモ欄】